

大東市埋蔵文化財調査報告第2集
昭和62年度国庫補助事業

宮谷古墳群調査報告書Ⅰ

北条六丁目地内

1988. 3.

大東市教育委員会

は し が き

今から2年程前に、一人の老人が教育委員会を尋ねて来られた。今度自分の家を四十年ぶりに建て替えをしたい、ついては、十五年程前に当時教育委員会におられた人に、ここは貴重な古墳があるから、今後家を建て替えするとか、土地をさわる時には必ず連絡するようにと言われているので来ましたとの事であった。今回の発掘調査が行われる契機は、このような十五年前の一言によるものであった。戦後の混乱期、毎日の生活のために一人でつるはし一本とモッコだけで山を切り開いた土地に、有舌尖頭器があり、石室があり、須恵器、鉄器があった。その幾つかは彼により丁寧に掘り出され、永い間大切に保存されてきて、現在新しくできた大東市立歴史民俗資料館に展示されている。今回の発掘調査は四十年前の当地の状況の復原、残存する遺跡の調査になり、その調査は困難ではあるが、市内で初めての補助金による発掘調査を実施することが出来て大変嬉しく思うものであります。またその際、中松登茂一氏には大変お世話になり、かつその協力に心から感謝するものであります。

昭和63年3月10日

大東市教育委員会

例 言

1. 本書は、大東市教育委員会が昭和62年度国庫補助事業として実施した、宮谷古墳群の緊急発掘調査事業の報告書である。
2. 調査は、大東市教育委員会歴史民俗資料館技師黒田 淳を担当者として、昭和62年12月2日に着手し、昭和63年3月31日をもって終了した。
3. 調査及び整理の実施には、石井裕己、大谷 聡、岡田幸博、玉本雅己、深沢吉隆、松本 哲、山口裕弘、山村俊之、山本裕子諸氏の協力を得た他、大阪府教育委員会松岡良憲、三宅正浩諸氏からは懇切な指導を賜わった。また、土地所有者の、中松登茂一氏からも多大な協力、援助を得た。記して、感謝の意を表する次第である。
4. 本書の執筆、編集は黒田が行った。
5. 本書の使用した標高はT.P（東京湾標準潮位）による。
6. 調査にあたっては、実測図、写真などの記録を作成するとともに、カラースライドを作成した。広く利用されることを希望する。

本文目次

第 1 章	地理的歴史的環境	2
第 2 章	調査に至る経過	3
第 3 章	調査の成果	3
	1. 層位	5
	2. 出土遺物	6
	3. 付近採集遺物	7
第 4 章	結語	8

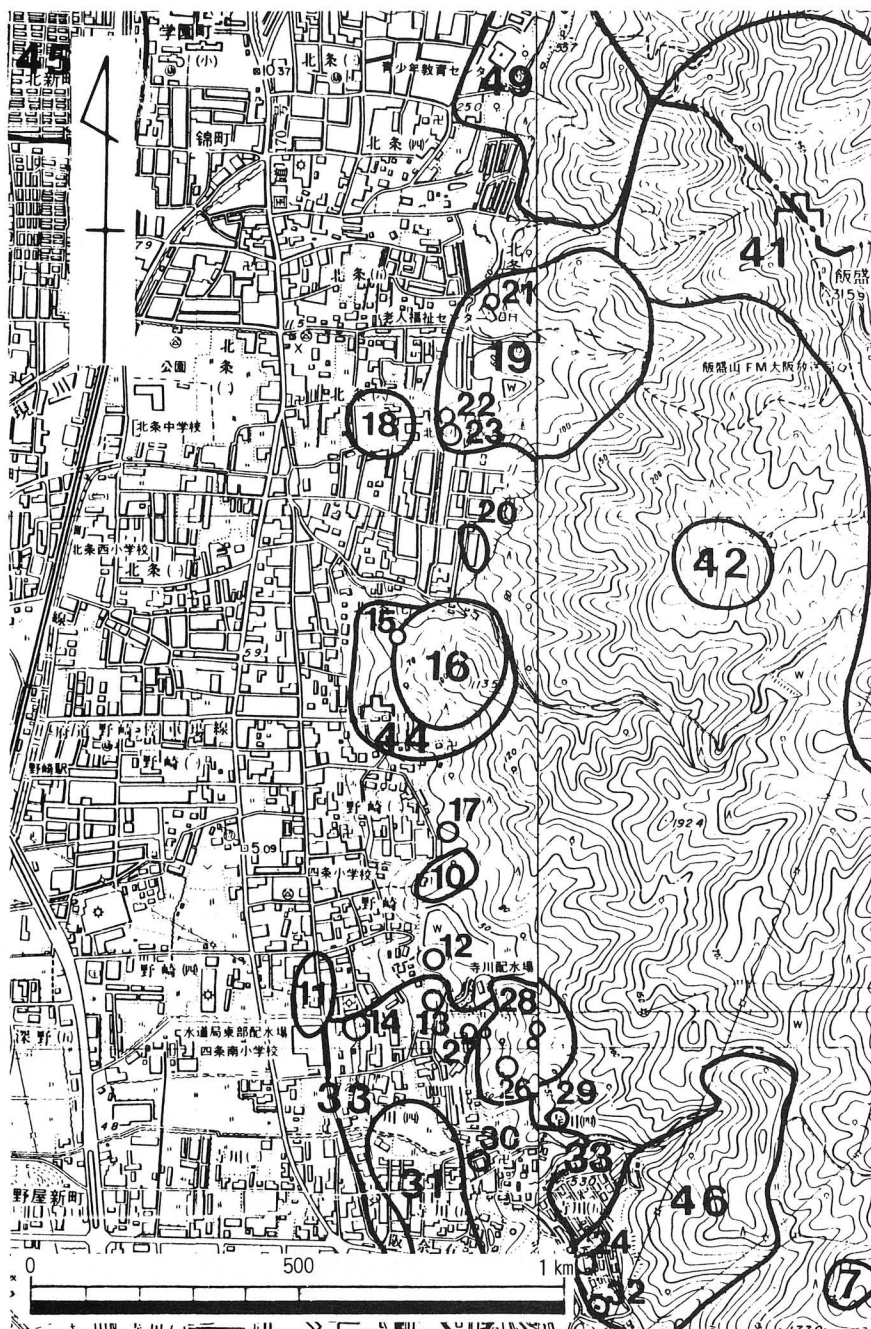
挿 図 目 次

- 第 1 図 周辺の遺跡分布図
- 第 2 図 調査地位置図
- 第 3 図 トレンチ配置図
- 第 4 図 トレンチNo. 1. 2. 5.土層断面図
- 第 5 図 トレンチNo. 3. 4. 6.土層断面図
- 第 6 図 出土遺物実測図
- 第 7 図 付近採集遺物実測図
- 第 8 図 付近採集遺物（鉄矛）実測図
- 第 9 図 採集遺物出土地点図

図 版 目 次

- 図 版 1 調査区全景
- 図 版 2 トレンチ No. 1
- 図 版 3 トレンチ No. 2
- 図 版 4 トレンチ No. 3
- 図 版 5 トレンチ No. 4. 6
- 図 版 6 トレンチ No. 5
- 図 版 7 出土遺物
- 図 版 8 付近採集遺物

第 1 図 周辺の遺跡分布図



- | | | |
|--------------|------------|----------|
| ⑦ 太鼓山遺跡 | ⑭ 宮谷古墳群 | ⑳ 十林寺古墳 |
| ⑧ 福蓮寺遺跡 | ⑮ 大將軍古墳 | ㉑ 寺川古墳群 |
| ⑨ メノコ遺跡 | ⑯ 北条古墳 | ㉒ 大谷神社古墳 |
| ⑩ 峯垣内古墳 | ⑰ 北条南古墳 | ㉓ 寺川遺跡 |
| ⑪ 市水道寺川配水場古墳 | ⑱ 北条遺跡 | ㉔ 飯盛山城跡 |
| ⑫ 瓦堂寺院跡 | ㉒ 城の越上の段古墳 | ㉕ 北条東古墳群 |
| ⑬ ヤタ山古墳 | ㉓ 堂山上遺跡 | ㉖ 野崎城跡 |
| ⑭ 野崎遺跡 | ㉔ 堂山下古墳 | ㉗ 北新町遺跡 |
| ⑮ 福蓮寺古墳 | ㉕ 堂山古墳群 | ㉘ 大谷古墳群 |
| ⑯ 北条西遺跡 | ㉖ 六地藏古墳 | ㉙ 墓谷古墳群 |

宮谷古墳群発掘調査概要

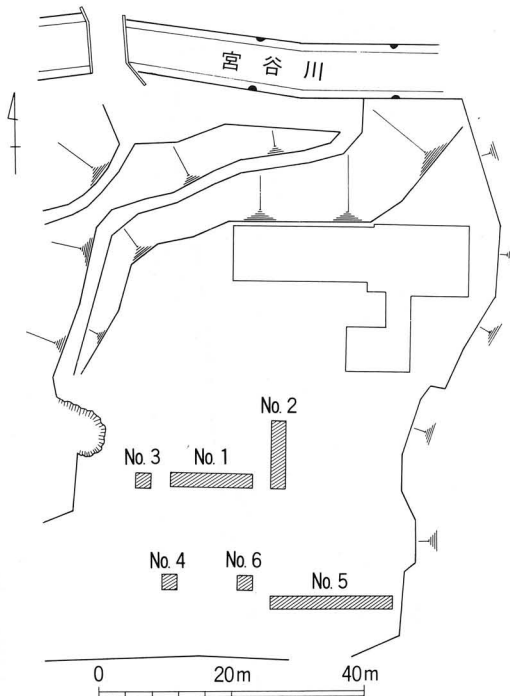
第 1 章 地理的歴史的環境

大東市の地形を概観すると、東には標高300～400mの生駒山地が南北に走り、山地と西方に広がる平野部には、この山塊より舌状に張り出した標高50～200mの尾根が、緩やかな丘陵となって平野部へと続いている。宮谷古墳群は、宮谷川を中心とするこうした尾根上に立地している。以前より当地においては、遺物が採集されていたが、古墳群の規模、内容等については、明らかではなかった。しかしながら、昭和62年に当地において実施された初めての発掘調査によって、古墳が1基（宮谷1号墳）発見されている。宮谷1号墳は、多量の埴輪を有した6世紀前半～中頃の径約10mの円墳で、6世紀後半に入ってから、新たに横穴式石室が築造されている。今のところ古墳群内において、古墳の存在を明確にし得たものは宮谷1号墳のみであり、依然として

古墳群全体の様相は明らかではないのが現状である。周辺を見渡すと、北には6世紀後半～7世紀前半に営まれた墓谷古墳群、南には5世紀末～6世紀末の北条1～3号墳⁽²⁾がある。さらに南には、中期の多量の鉄製武器、武具類を、出土した。首長墓級の堂山1号墳を含む堂山古墳群や、これも実態は明らかではないが、寺川古墳群、大谷古墳群が存在している。このように後期に入ると、生駒



第2図 調査地位置図



第3図 トレンチ配置図

なかった。こうしたなか、土地所有者の中松登茂一氏より、住宅新築の旨届け出があり、工事に先立つ事前調査として、発掘調査を実施した。調査は建物の敷地部分と、新たに私道を造る部分にトレンチを設定した。また、調査地周辺の測量調査も、併せて実施した。現地調査は、昭和62年12月2日に開始し同年12月26日をもって終了した。

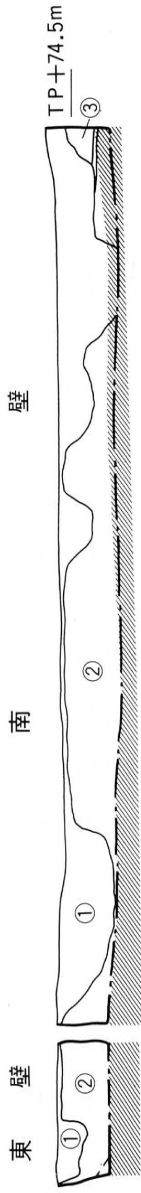
第3章 調査の成果

今回の調査地点は、宮谷川左岸の西へのびる尾根上に位置している。建物敷地部分は、土取りや開墾などによって、すでに原地形の大半が失われている。このため、建物部分は、地山までの深さを確認するための東西方向、南北方向のトレンチを設定し、旧地形をとどめていると考えられる道路予定地にもトレンチを設定した。

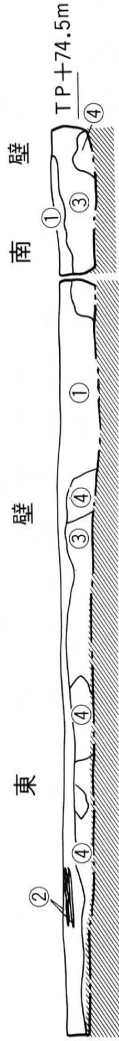
山地から西方へ派生した尾根上一帯には、さかんに古墳が造営され、後期の群集墳が形成されるようである。こうした状況からすると、宮谷古墳群も後期の群集墳の一つとして、とらえることができよう。

第2章 調査に至る経過

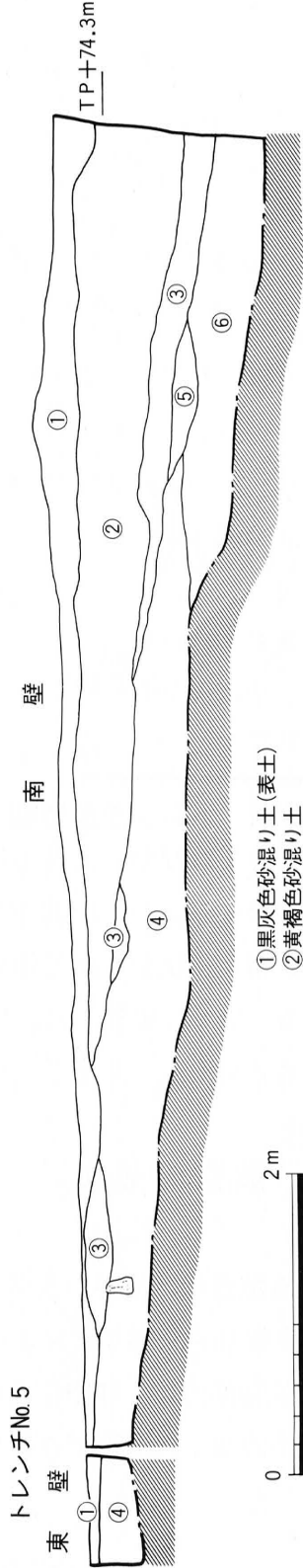
今回調査を実施した地点は、北条6丁目2227番地に当たる。以前より、須恵器、鉄矛などの遺物が採集されており、古墳の存在が推定されていたが、その実態は明らかでは



- ① 黒灰色砂混り土(表土)
- ② 黄褐色砂混り土
- ③ 黒色土



- ① 黒灰色砂混り土(表土)
- ② 黄褐色砂層
- ③ 黄褐色砂混り土
- ④ 暗黄褐色砂混り土



- ① 黒灰色砂混り土(表土)
- ② 黄褐色砂混り土
- ③ 暗褐色砂混り土
- ④ 暗黄褐色砂混り土
- ⑤ 黄褐色砂混り土
- ⑥ 黄灰色砂混り土

第4図 No.1、2、5土層断面図

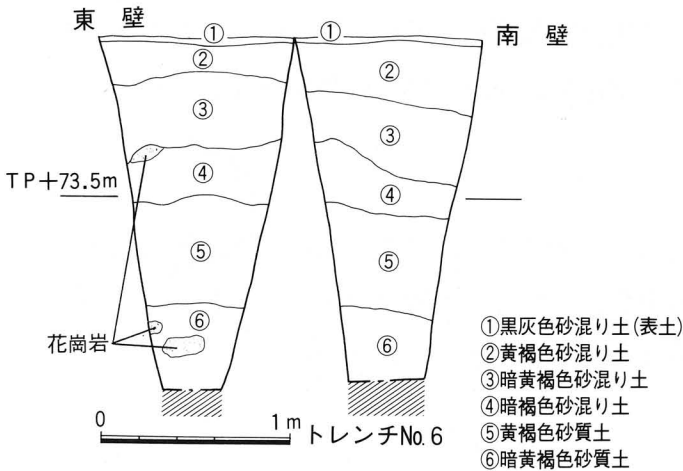
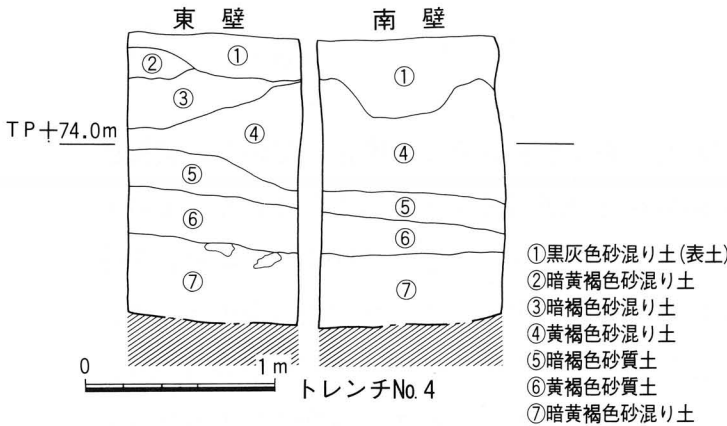
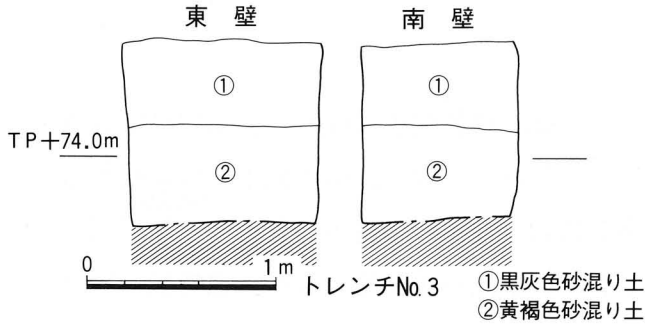
1. 層位

トレンチ No. 1

建物敷地部分に東西方向に設定した。表土の黒灰色砂混り土を除去すると、黄褐色砂混り土になる。凸凹があるのは、人工的に掘られたゴミ穴や焚き火等の穴で、木炭が含まれていた。さらにその下層が地山（黄灰色の岩盤、風化した花崗岩を含む）である。地山面は平坦である。遺構は検出されなかった。黄褐色砂混り土から須恵器の小片が出土している。

トレンチ No. 2

建物敷地部分に、南北方向に設定した。表土を除去すると、黄褐色砂混り土になる。暗黄褐色砂混り土が、ブロック状に入り込んでいる。トレンチ No. 1 と同様に地山面は平坦である。遺構、出土遺物はなかった。



第5図 トレンチNo. 3、4、6土層断面図

遺構、出土遺物はなかった。

トレンチ No. 3

トレンチ No. 2 の西へ約 1.5 m の地点に設定した。層位的にはトレンチ No. 2、No. 3 と変わりはないが、各層の層厚が厚く、地山までの深度が深い。遺構、出土遺物は、なかった。

トレンチNo. 4

道路予定地に設定した。表土の下には、暗黄褐色砂混り土、暗褐色砂混り土がある。南壁では、これらの層は見られない。以下、地山直上まで、褐色系の土が堆積している。地山までの深度は約1.5 m、暗褐色砂質土より須恵器小片と土師器小片が出土している。これらの状況から判断すると、遺物包含層はかなり動いていると考えられる。

トレンチNo. 5

道路予定地に東西方向に設定した。表土が約20 cm程堆積している。黄褐色砂混り土より、磨耗の激しい土師器片と須恵器片が少量出土している。その下には、暗褐色砂混り土が途切れつつも、約10 cmの厚さで堆積しており、弥生土器底部、サヌカイト片、土師器片等などが出土している。地山直上までは、暗黄褐色砂混り土、部分的に黄褐色砂質土が堆積している。黄褐色砂質土は、溝の埋土かと思われたが、溝になり得なかった。この層から内面が黒色を呈する土師器皿片が出土している。黄灰色砂質土は、地山と同系色で、ここからも土師器片が、少量出土している。地山は、東から西への傾斜を示している。

トレンチNo. 6

トレンチNo. 5の西約1.5 m、トレンチNo. 4との間に設定した。層位的にはトレンチNo. 5と変わりはないが、地山直上の暗黄褐色砂混り土には約20 cm大の花崗岩の丸石が混入していた。遺構、遺物の出土はなかった。

2. 出土遺物

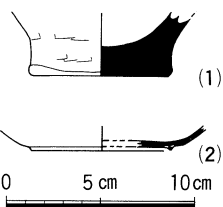
トレンチNo. 1

須恵器の小片が出土している。内面に同心円の当て板痕が残る。外面は、カキメと列点文が、微かに認められる。

トレンチNo. 4

須恵器の小片が出土。自然釉をかぶる。器形は不明。

トレンチNo. 5

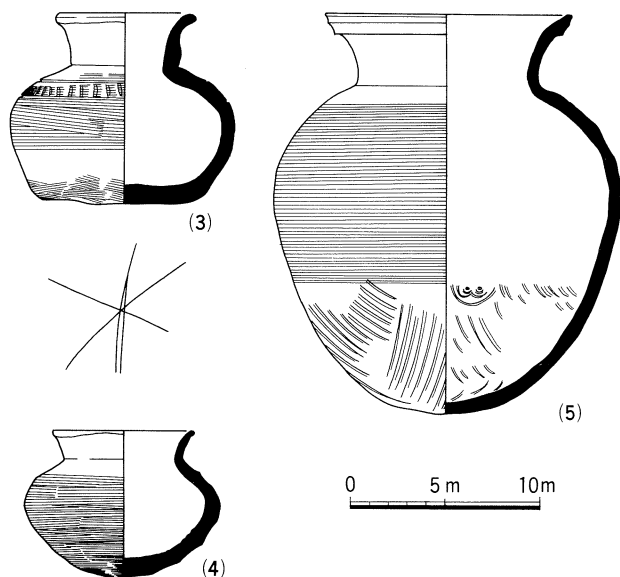


第6図 出土遺物実測図

最も多くの遺物を出土しているが、弥生土器、須恵器、土師器片の他サヌカイト片が出土している。弥生土器(1)は底部のみで比較的大型である。調整はナデによるものだけでおそらく、中期の壺の底部であろう。須恵器は薄手で内面は当て板痕を擦り消している。外面には7~8条のハケメが残る。自然釉をかぶる。土師器(2)は皿で、内面黒色を呈し、底部に断面逆三角形の低い高台を有する。時期は、奈良時代のものである。サヌカイト片は製品ではなく、いずれも剥片である。

3. 付近採集遺物

調査地の周辺では次のような遺物が採集されている、須恵器は口縁部を少し欠く程度で、いずれも完形品である。



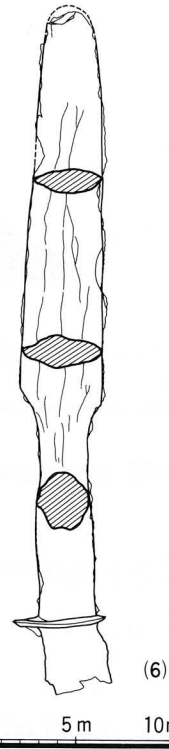
第7図 付近採集遺物実測図

(3)~(5)は須恵器の壺である。(3)は肩の張った体部に短い頸部が付く。口縁部は外へ開き、端部は丸く仕上げている。底部は平底である。調整は肩部から胴部の約半分にカキメ調整を施し、底部付近には不定方向のハケメが残る。底には不定方向のハケメを施した後、図のようなヘラ記号を施している。肩部には2条の沈線を施しその間には櫛描き列点文を加えている。

(4)は口縁部は斜め上方へ広がり、端部は外へ広がり気味に終わる。体部は肩の張りが弱く、肩部付近より底部までカキメ調整を施す。但し底部の調整は不完全である。(5)は口縁部が逆ハの字状に広がり、口縁端部は斜め

上方に向かい丸く終わる。外面には、肩部から胴部の3分の2にかけてカキメ調整を施し胴部下部から底部にはタタキ痕が残る。内面は胴部下部から底部に当て板痕が残るだけで、あとはナデによって丁寧になされている。

(6)は鉄矛である。全長35.7cm刀部長20.7cmである。袋部断面は歪んだ円形で、径約3cmである。刀部断面はレンズ状を呈する。刀部幅3cm関幅4.5cmで、袋部には鏝を有する。



第8図 鉄矛実測図

これらの遺物の出土地点は図9に示すとおりで、(5)の壺のみが調査地の南の谷を隔てた尾根上で出土している⁽⁴⁾。

第4章 結語

今回の調査では今回の調査では遺構は、検出されなかったが、トレンチNo.1、No.4、No.5からは、少量ではあるが、遺物



第9図 採集遺物出土地点図

が出土している。時期は、弥生時代～奈良時代のものがある。また、調査地周辺からは、須恵器壺、鉄矛などが採集されている。古墳に伴う遺物と考えられるが、今回の調査では、残念ながら古墳を検出することは出来なかった。しかしながら、これらの遺物から、後期古墳が存在したことは確実であると考えられる。また、奈良時代の土師器、須恵器片が出土していることから、同時代の遺跡の存在の可能性があることが判ったことは、意義が大きい。

註

- (1) 円筒埴輪の他、石見型盾形埴輪、家形埴輪、人形埴輪、蓋形埴輪が出土している。
- (2) 北条1号墳、2号墳は1986年の調査によって発見された。
三宅正浩、黒田淳「寺川・北条遺跡発掘調査報告 大東市埋蔵文化財調査報告第1集」大東市教育委員会(1987)。
北条3号墳は1987年の調査によって発見された。
- (3) 田代克己、瀬川健「堂山古墳発掘調査概要」大阪府教育委員会(1973)。
- (4) 中松登茂一氏の御教示による。

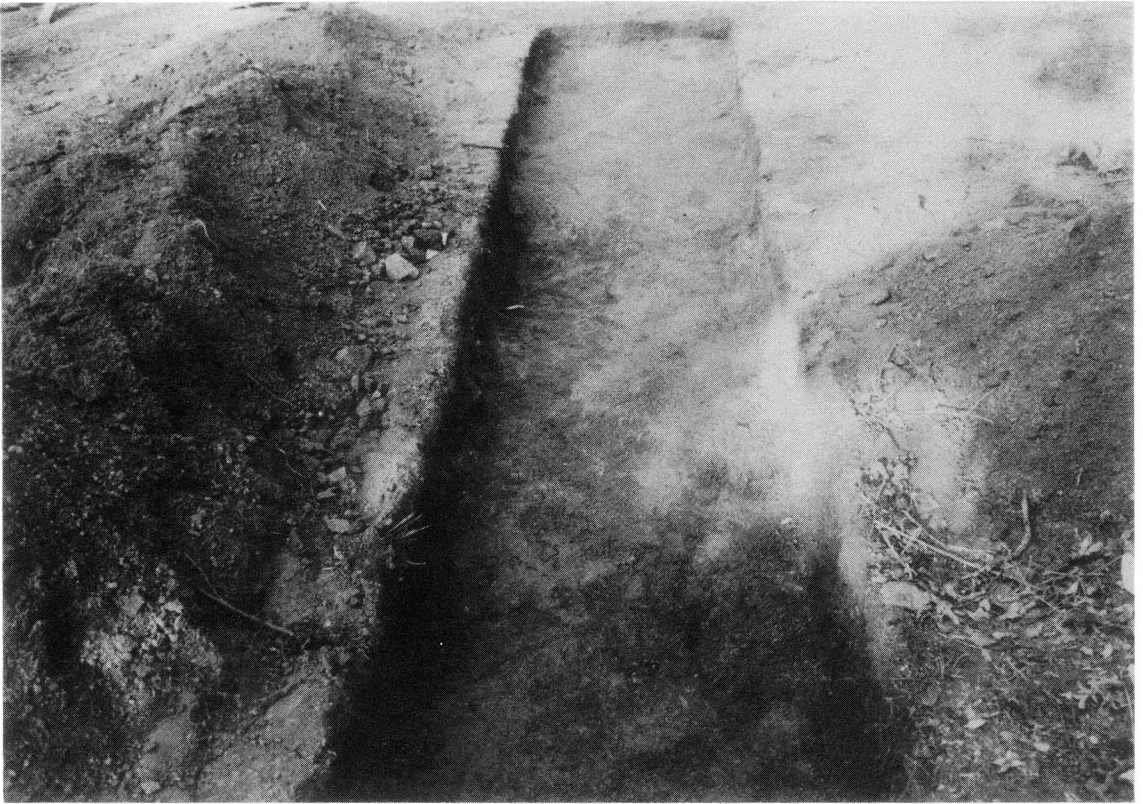
図版 1 調査区全景



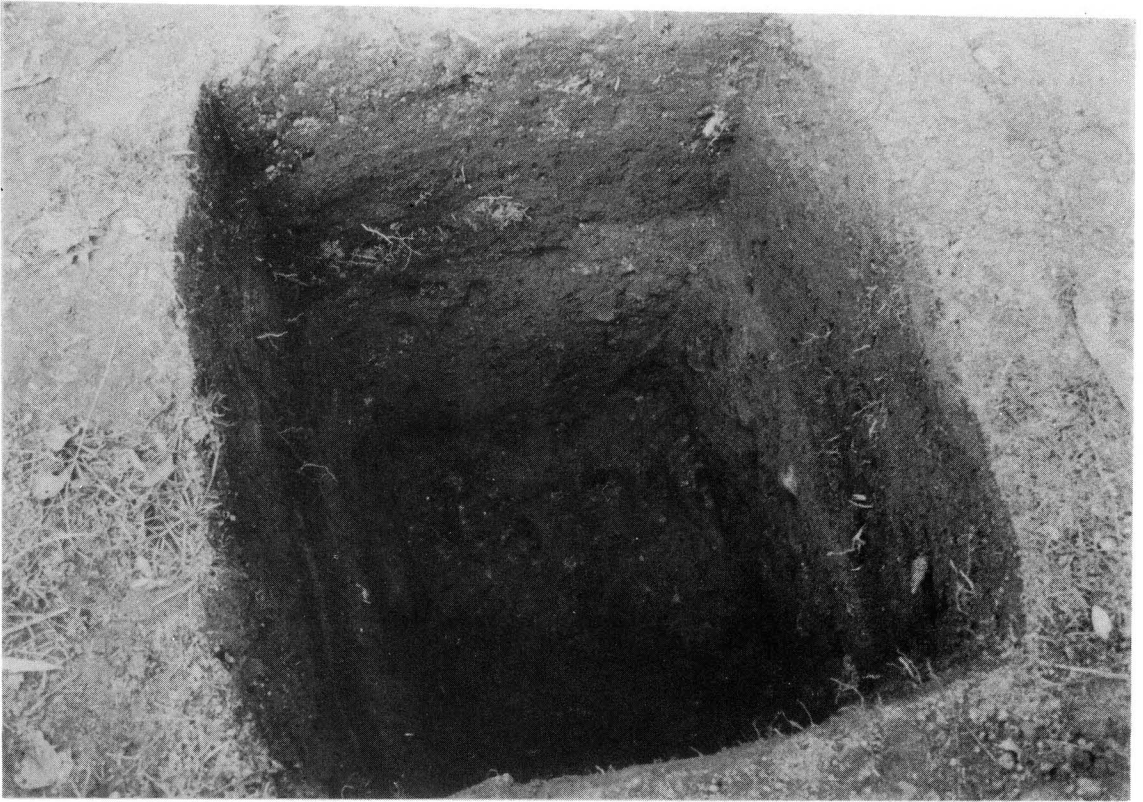
図版 2 トレンチ No. 1



図版 3 トレンチ No. 2



図版 4 トレンチ No. 3



図版 5 トレンチ No. 4, 6

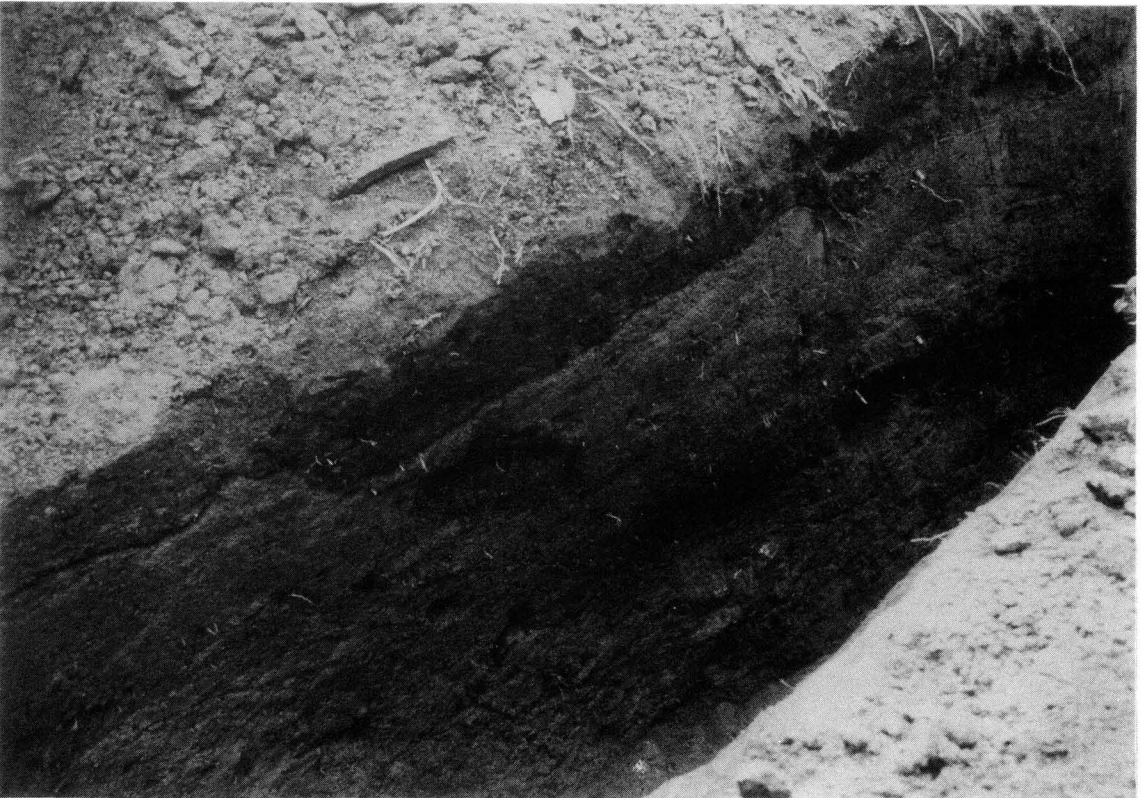


トレンチ No. 4

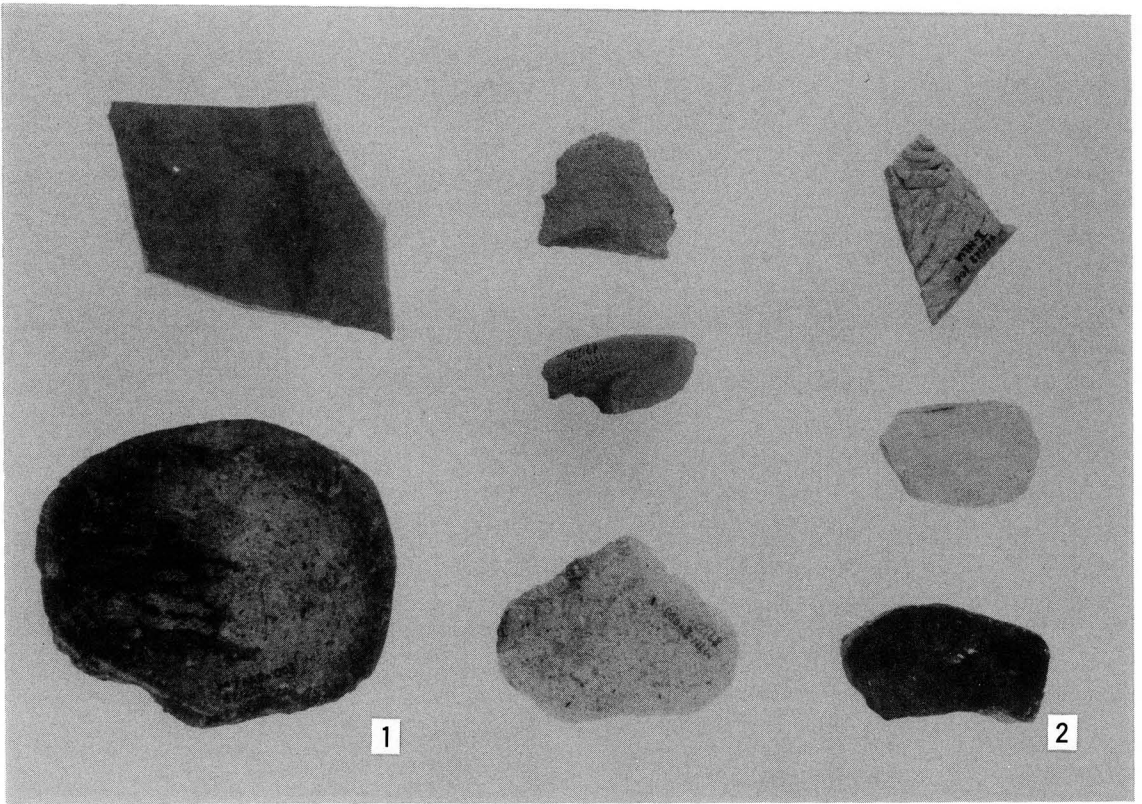


トレンチ No. 6

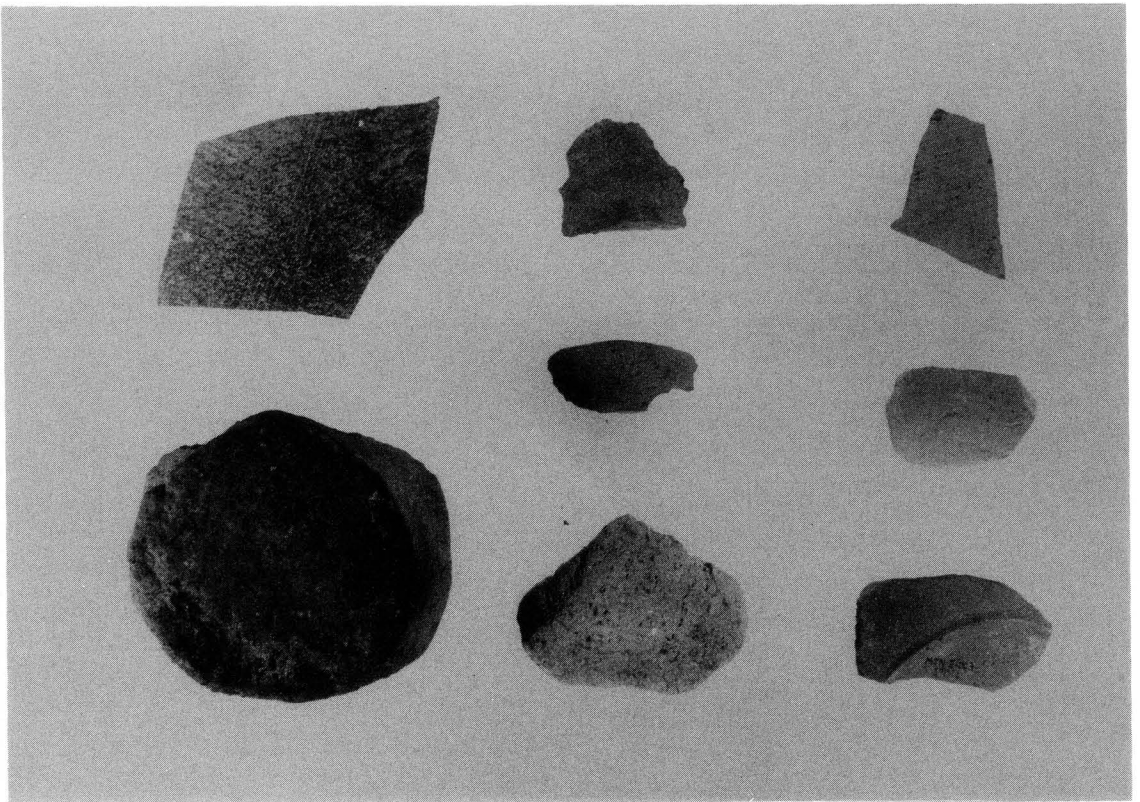
図版 6 トレンチ No. 5



图版 7 出土遺物

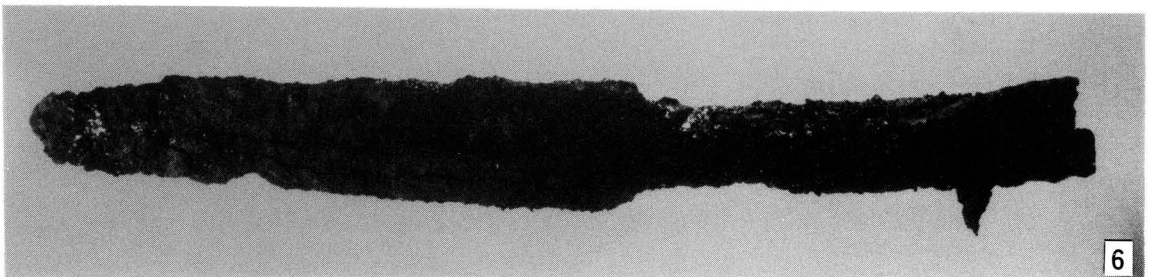


1. 弥生土器 2. 土師器皿



同 上

図版 8 付近採集遺物



3~5. 須恵器 6. 鉄矛

